

南米に保育園を作る

—ボリヴィアの子どもたちとお母さんたちのために—

北浦久美子

「ボリヴィア」という国名をご存じですか。一世紀前、新たな希望を持ち移住した日本人が多く住む、縁の深い国です。日本から見たら地球の反対（裏）側の南半球の国です。この国を紹介する時、必ず地図を用意しています。私がこの国と関わったのは、青年海外協力隊の参加でした。その後、八年の歳月

が経過した今も、活動を続けています。現在は郵政省の支援と自ら作った民間支援団体の協力により保育園を運営しています。施設を媒介とした、教育・栄養・保健分野での協力活動です。「友人・お世話になった人々の国でNGOの活動をする」という個人の思いが、周囲を巻き込み、異文化での出会いが

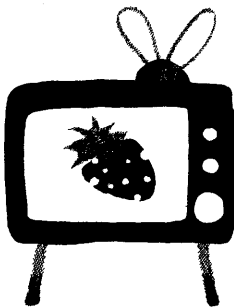
幼児教育への思いを駆り立て、更に自分の人生観をも変えてしまった気がします。

ここでボリヴィアの現状を少しお話し致します。人口約八〇〇万人、南米の中でG N Pが一番低い国です。経済力の源と呼べる産業がなく、政府は他国に経済の活力を委ねています。国土は日本の三倍の広さです。九つの県から成り立ち、気候・地形が様々で同じ国とは信じがたいほどの違いがあります。就学率は低く、義務教育は中学までです。休学をしても復学制度があるため簡単に学校に行かなくなる子ども達も少なくありません。子ども達の多くは、家計を助けるため仕事に専念します。そして実際に復学する率は大変低いように思います。

活動地のスークレ市は、法律上の首都です。人口十八万人、標高二八〇〇メートルに位置する高山地方です。独立宣言の地・ユネスコの世界遺産として、名を挙げた町です。ボリヴィアの古都で学生の

街でも有名です。ここにも大きな産業がなく、国内でも失業率の高い地域です。町には先住民族・白人系・混血メスティソと呼ばれる人々が住んでいます。国民の約六割が先住民の血をひき、他国にはない課題を抱えています。特にここ数年は、異常気象による不作・現金収入を強いられた生活から、農村地区出身の町への移住が増加しています。「イリマニの会」は、そんな彼らを支援の対象としています。彼らは頑なに自分たちの文化や習慣を守り続けています。しかし、彼らの生活に変化が現れました。婦人たちが仕事に出るようになったのです。

「なぜ、南米に保育園を作ったのか」、単純に二年間生活した国での体験を通し



て、子ども達と彼らを取り巻く家庭に対して支援できると考えたからです。そして、私の専門が保育であったことが一番の理由でした。開発途上国とは言葉、資金面や保育施設の運営について無知識の人間が計画したのですから、何て無謀な話だったでしょう。

開園当時は、建物も充実した教材・人材もなくと不十分なものでした。しかし、自分たちで作る出す喜びは持ち合わせ、一つずつ手作りの保育施設が南米で生まれました。要領の悪い私ですが、体力と気が自慢。強い意志と願いが、時として予想以上のものを作り上げる事に驚きました。そうして出来た四つの保育施設は、現地のケチュア語でMISKY・HUSAISI（心地よい家）と命名され、ミスキイの略で親しまれています。自分たちの活動だけが浮き立たないように、周りとの調和も心がけています。保育施設が開園するまでに、多くの国内外の

理解を示してくれた人々の協力がありました。そして、実現できました事を感謝しています。

現在、市郊外の四か所に保育施設があります。市場内の施設は、市場で働く母親のための保育園です。入園希望者が多く、順番待ちのリストを用意する程、評判になりました。

ミスキイ・ウアシイの第一号園は、ギジェルミーナという黒髪を三つ編みにした女性の持ち家の敷地を借り、開園しました。手作りの園ですから、彼女たち現地の人たちの協力なしではありえません。園内で使用する物の殆どが手作りです。子ども達と保育スタッフのエプロンは、私が生かしていたカーテンを利用してミシンで縫いました。地味な色のためステンシルでクマの絵柄付き。型紙もなく、新聞紙で見本用紙を作りました。苦肉の策はあちこちにあります。子ども達の遊具も、当然手づくりです。簡単な物から、積み木・小麦粉粘土・黒板



▲第一号園のミスキィ・ウァシィ 現地の保母と子どもたちを連れての散歩（このエプロンが手作りのカーテン生地のものです）

等々。積み木は、知人の木工所から木の端きれをもらって、みんなで紙やすりを使って磨きました。小麦粉粘土も保育者と一緒に作りました。日本のものとは、少し違い火にかけます。子ども達は繰り返し遊べるので、この二つの遊びは人気です。安くて素敵な遊具が出来る事に、現地スタッフも大感激しました。手作りですから、保育者たちも物を大切にします。自分たちで作った物ですから、愛着もあります。

その他にも、色々な物を手作りしました。園では、朝食・昼食・朝昼のおやつを給食として出します。その献立も、南米の食事事情に詳しい、友人の栄養士の手を借りて作成しました。安価な材料で高い栄養価を目指して。私たちの自慢は、毎日のコップ一杯の牛乳です。市内のNGOから、質のよい牛乳を安価で分けてもらいます。これは、他の園になり取組です。また、最近になりパンも手作りです。

これらの栄養が、摂取されているかを小児科医の医療スタッフが調べます。入園前の蟻虫検査、駆除のための処方箋等の活動もしています。

南米の保育園では、公私営を問わず無資格の婦人が保育するケースが多く、当初は改善する箇所が多さに驚きました。現地には保育者育成の機関がありません。幼稚園教諭は免許が必要ですが、その制度も課題が多く、質の向上を目指していますが、前途多難な状況です。月日の経過と共に、児童保護法や福祉の改善が見直され、保育者に対する見方も変化があります。

保育園の運営以外にも「人作り」という大きな目的を持つ活動があります。それは、現地保育者の育成です。この活動は、私にとって大きな励みと刺激を与えてくれます。現地の保育者が一人でも多く、子ども達の成長を考えながら保育出来るように、また彼女たちが自分の職業に対して自信が持てるよう

に、同じ保育者として力になりたいと想っています。そのために八年間続けている保育者のための保育セミナーを今後も続けていくつもりです。市内の保育施設では、保育者でも識字者とは名ばかりの人も多く、この数年にやっと保育者は識字者であることが義務づけられ、保育者の事を「子どもをお世話する人」と呼んでいたのが、「教育する人」と呼ばれるようになりました。短期間では気づかない出来事も、活動が長期になるとその変化もよく理解出来るものです。

園は、働く母親に代わって保育する所だけではないと考えました。園に通ってくる子ども達の父母と一緒に活動したいとも考えました。特に、家庭の中心的存在である母親が知識を得ることで、家族全員の健康と福祉の向上を目指します。一家庭には、平均五〜六人の子どもがいます。そして、多くの母親が一〜二人の子どもを、一歳未満で亡くしていま

す。その死亡原因は、妊娠時の母子どもの栄養不良、下痢・発熱による脱水症状からです。死亡前に何らかの手を打つことで命を助けることが可能なケースが多く、母親の役割の重大性を感じます。そして、父母が知識を得られるための勉強会を開き、子ども達を園や地域の人々と一緒に育てるような活動をしています。活動の恩恵が、一部の人々のみにならないよう、大きな行事は地域の住民と共に行っています。更に、母親には母体の健康維持や栄養面での指導を医療専門家を交え、行っています。

保育施設の活動を始めてから、多くの失敗や疑問が、私や現地スタッフから生まれました。そして、沢山の住民の変化も見えてきました。日雇いの親から、毎月決まった日に納めてもらう保育料の問題。一か月で退園する子ども達、出入りの激しい園など。このような葛藤の中、子ども達が明るい希望を運んでくれました。保育園を開園してから、二年目



▲園外保育にて 石ころもおもちゃのかわりに。子どもたちとの会話はとても貴重な時間。思わぬ想像が広がります。

の事でした。「うちの子は、毎日楽しみに通っています」「絵を描いたり、歌を歌ったり、いろいろ覚えてきます」「お休みの日も行くってきません」などの父母からの言葉に、子ども達の変化が見えてきました。そして、父母の会が自発的に発足し、母親や父親との信頼関係が自然と生まれました。福祉面での活動は、この信頼関係なしでは出来ません。家庭内で生じる悩みや、立ち入った事情を聞く時は大変な作業でした。それが、相手側から悩み相談を持ち込むまでに変化しました。「持続は力なり」、それを実感したのでした。そして、その難しさにも対面しました。活動が順調な現在も、活動を続けるための対策を常に考えています。

「ミスキイ・ウアシイ」の意味するように、押しつけや傲慢ではない、家族ならば当たり前の愛情を注げる、そんな活動を目指しています。私自身も、保育者として支援したいと考えます。ポリヴィアの子

どもたちとお母さんたちのために、そして私自身のためにつくった手作りの保育園。これからも、多くの課題を解決しながら少しずつ成長したいと願っています。南米だからできる活動、南米に必要な活動をみんなで作えながら、続けて行こうと思っています。きっかけは、些細な出会いから……。

(民間ボランティア団体「イリマニの会」)

現地代表